

目的 農業の近代化や生活様式の変化に伴い、消滅しつつある在来型作業着中、最も機能性を要求される上着下衣に着目し、特にゆきはかまの宮城県における形態・名称・分布などについて考察する。

方法 宮城県内における聞きとり調査資料及び東北6県の民俗資料により検討考察する。

結果 6県からなる東北地方は南北に奥羽山脈が走り、東に太平洋、西に日本海が開け、平野が広がっている。東と西では気候・風土は勿論、生活文化も異なる。宮城県は太平洋側に位置し、行政や交通の中心地として東北地方の中核的役割を担って発展している。

宮城県における作業着下衣の種類は、股引・股引もんぺ・もんぺ・もんぺ型ゆきはかま・ゆきはかまなどである。ゆきはかまの形態は膝上が袴型で、膝下は股引の様に脚部に密着し、脛襠の大きさを調節する。股割れの股引に比べ腰廻りのゆるみが多く上着や下着を着込むことができ、防寒用として特に女子に好まれた。同型のものでも他にハカマ・タツツケ・サルコハカマ・モッコハカマなどの呼称が若干ある。ゆきはかまの分布は北西の山間部、特に栗駒山・蔵王山麓に見られ、名称の通り積雪地域に用いられている。このゆきはかまは、山袴の分類ではタチツケと同じ前二布に後二布の短小型に属する。民俗資料によれば全く同型のもので、青森・岩手・山形・福島ではサルハカマやタツツケで、秋田県はスネコモッペが主な呼称である。県外においては、タチツケ型のもをゆきはかまと称している所は見られない。袴という名称に特に拘りを見せていて、これは宮城県独自の呼称と思われ興味深い。